

H・G・ベック著／戸田 聡訳

『ビザンツ世界論』

——ビザンツの千年——

知泉書館 二〇一四・三刊

A5 六二六頁 九〇〇〇円

本書は一九七八年(第二版は一九九四年)に刊行されたハンス・ゲオルク・ベックの名著の『*Das byzantinische Jahr-tausend*』の戸田聡氏による全訳である。ベックは二〇世紀を代表するビザンツ研究者の一人であり、その研究対象は理念・国制、教会、文学など多岐にわたる。本邦においても故渡辺金一氏が中心となり、『ビザンツ世界の思考構造』(渡辺金一編訳、岩波書店、一九七七年)をはじめとするその業績の多くが紹介・翻訳されてきた。

訳者あとがきにおいても言及されているが、ベックは異色の経歴の持ち主であり、修道士から還俗してミュンヘン大学で教鞭をとった人物である。本書が刊行されたのは定年退官後であり、ベック晩年の「集大成」の一つと位置づけることができよう。

原題(邦訳の副題)にあるように、本書はビザンツの千余年の歴史の全てを対象とする。しかし同じ千余年を扱う書物でも、G・オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』(和田廣訳、恒文社、二〇〇一年)のように通時的叙述を行うわけではなく、その内容は各章がトピックごとに分かれていた。そのトピックも網羅的に選ばれているわけではない。経済史は削ったと著者自身が述べており、

その他美術史や考古学も扱われていない。史料も刊行されたテキストが中心で、印章や文書についてもあまり触れられてはいない。

しかし、これはベック自身の意図があつたことである。各章の題を列挙すれば、二章「国家と国制」、三章「政治的オルトドクシー」、四章「文学」、五章「神学」、六章「修道制」、七章「ビザンツ社会についてのコメント」、八章「ビザンツ人の信仰」、九章「歴史という次元」、となつており、教会や宗教といったテーマに多くの紙幅が割かれている。というのもベックは三章にもある「政治的オルトドクシー」概念がビザンツを読み解く鍵だと考えており、そのため通常は(特に歴史家には)見落とされがちな神学・教会史のテキストも取り入れ、^{オルトドクシー}正教をはじめとする、ベックが重視する諸要素に力点を置いた叙述を行っているのである。即ち本書は「概説」ではなく、ベックの『ビザンツ世界論』を志向したものであり、その意味でも邦題は正鵠を射たものだと言えよう。

もちろん、そうした性質のために本書の内容には今日の学界の動向と一致しない部分や、議論が分かれる部分もあり、その点には注意を要する。しかしベックが選びとった諸要素が、ビザンツ理解にとって重要となる諸問題を多面的に提示しているのは間違いない。

その本書について、教え子ですらその *baroque* さ故にあまり読まれていないと評する(例えば V. Falkenhausen, "Hans-Georg Beck", in P. Armstrong, ed. *Authority in Byzantium*, Farnham 2013, pp.337-344) ベックの著述を、内容を損ねずに正確に翻訳した訳者には敬服するよりほかになく、本書が我が国の多くの読者にとってアクセス可能

となった意義は大きい。筆者・訳者も述べているように、特にビザンツに関心を持つ若手を中心に本書が広く読まれ、今後ビザンツを考える糧となることを期待したい。

(仲田公輔)